スペインにおける人類学研究の展開
──地方主義を超えて

バルセロナ大学地理歴史学部のキャンパス。スペインで人類学科が最初に設置された（2015 年 11 月、バルセロナ）。

スペインではヨーロッパのなかでも比較的早い 19 世紀後半から人類学研究が始まったが、大学において人類学が 1 つの学として確立されるのは 20 世紀後半になってからである。とくにその進展を阻害したのが、20 世紀に入り、約 40 年にわたり続いたフランコ独裁政権（1939 ～ 1975）である。この間、知識人の多くが国外に流出し、人類学をはじめとする人文社会科学研究は大きく停滞した。しかしその後、イギリスやアメリカなど諸外国で学んだ人類学者が帰国し、1960 年代末頃から各地で教鞭をとるようになる。1970 年代末から国内の大学で新たな学部・学科の創設が進むと、1980 年代には主要 3 都市の大学で人類学の学科が開設された。首都のマドリード・コンプルテンセ大学ではイギリス式の社会人類学が、バルセロナ大学とセビリア大学ではメキシコから帰国した人類学者によりアメリカ式の人類学が導入された。

こうして確立された現在のスペインの人類学界を見渡すと、その研究対象地域に大きな偏りがあることに気づく。バルセロナ自治大学の調査（2008 年）によれば、人類学者全体のじつに 7 割が国内をフィールド（とくにカタルーニャ、バスク、ガリシア）の 1 つとしており、これと合わせて主としてラテンアメリカまたはアフリカの国々を調査対象にしている。後者については、たんにかつて植民地支配にあった国々というだけでなく、今日においては両地域から押し寄せる移民の問題など、相互の関係の深さや身近な他者に対する関心が指摘できる。

一方、とりわけ自国をフィールドとする研究が多い背景の 1 つには、スペインの人類学が古くは 19 世紀に始まる民俗学を吸収して成立したことが挙げられる。だがそれ以上に、上述の流れを経て確立した 20 世紀後半の人類学は、独裁政権下で抑圧された地方の個別文化やアイデンティティを模索する動きと相まって醸成されたことが大きな要因でもある。たとえば、セビリア大学では、1980 年代に人類学科の教員により「アンダルシアの社会文化的アイデンティティに関する研究グループ」が結成された。そこでは、アンダルシア地方を舞台に描いたピット＝リバースの民族誌『シエラの人びと』に批判的な見解を投げかけつつ、アンダルシア文化の多様性やネイティブの側から自国の文化をいかに描くかという議論が盛んに行われてきた。

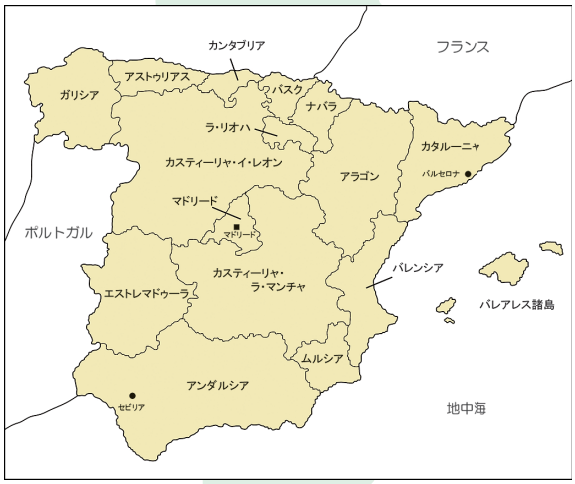
また、各州を基盤にした地方主義も研究体制を特徴づけている要素の 1 つである。地方により異なる言語や文化的特徴を持つスペインは地方主義が強いことで知られる。政治的にはカタルーニャやバスクなどでは分離独立を求める動きも活発である。とくに 1975 年に始まる民主化・地方分権化以降は、大学における研究プロジェクトの多くが、各州の予算に基づき実施されてきたため、共同研究の主体は同じ州の大学の研究者に限られる傾向があった。これが異なる州の大学に所属する研究者のプロジェクト参加を困難にし、閉鎖的な研究状況を生み出してきたという。

そうした結果、スペインにはアメリカや日本のように、全国レベルの学会はこれまで存在せず、地方毎に人類学の学術協会が組織されてきた。現在、カタルーニャ、バレンシア、カスティーリャ・イ・レオン、マドリード、アンダルシア、ムルシアなど国内の 9 つの地域に人類学系の学術協会が存在する。

こうした状況を前に、近年、国内の人類学系の協会を統合し、全国レベルの学会の組織化を目指す動きも見られる。その第一歩として誕生した、スペイン人類学協会連盟（FAAEE）は、各地の人類学系の学術協会を総括する組織であり、各協会およびメンバー間の交流の促進と研究の進展を目標に掲げ、2 年毎に研究大会を開催している。政治的には一部の地域で分離独立の動きが強まっているのに対して、学術面ではこれまで地域的・断片的であった研究組織が統合化に向かっている点は興味深い傾向と言える。

ラテンアメリカ研究に関しても、2015 年にイベロアメリカ人類学者協会ネットワーク（AIBR）の第 1 回目の研究大会がマドリードで開催され、ラテンアメリカ研究に従事する国内の人類学者がはじめて一堂に会した。2002 年に正式に発足した AIBR は当初、ネットを通じた研究情報の発信や学術誌の出版を中心に活動を展開してきたが、その後スペインはもちろん、ヨーロッパとアメリカの両大陸の人類学者がメンバーに加わりここ数年で拡大した。記念すべき最初の大会には 100 件以上のセッションが組織され、約 800 名が参加した。今後は毎年研究大会を開催する計画である。

スペインでは経済危機に陥って以降、州政府の財政難が研究にも影を落としている状況である。そうしたなか、学術面だけでなく、資金面でも地域を超えた連携の必要性が高まっている。その意味で、今後も従来の枠組みを超えた新たなメカニズムが更なる広がりと重要性を持って展開していくことが予想される。



スペイン州区分図（筆者作成）。

文・写真　八木百合子

国立民族学博物館機関研究員。専門は文化人類学、ラテンアメリカ地域、とくにアンデス地域の民族学研究。著書に『アンデスの聖人信仰──人の移動が織りなす文化のダイナミズム』（臨川書店 2015 年）、論文に「聖女に捧げられた大聖堂──近代ペルーの都市建設に埋め込まれたコンフリクト」『アンデス世界──交渉と創造の力学』（世界思想社 2012 年）などがある。